

サンスクリット詩人の慣用表現 (中)

ハザリー・プラサード・ドゥヴィヴェーデー
 訳 町 田 和 彦

九 クムダ花 (kumuda)

『ダンヴァンタリ語彙集』によれば、パドマ花(一九の項参照)に七種の区別があります。クムダ花はその一つです(『ヴァナウシャディ・ダルバナ』四〇一ページ)。上記の語彙集によれば、クムダの別名はカルハーラ (Kalhara) です。しかし『アマラ・コーシャ』(一〇一三五)によれば、サウガンディカ (saugandhika 白ぐバドマ花) のみがカルハーラと称され、クムダではありません。『バーヴァ・プラカーシャ』(三三三)でも、クムダとカルハーラは区別されています。『バーヴァ・プラカーシャ』と『アマラ・コーシャ』(一〇一三六)のいづれも、クムダは白色のみということになっていますが、何人かのヴァイディヤは赤色のクムダについても記しています(『ヴァナウシャディ・ダルバナ』五〇一ページ)。ダルハナはこの俗称をクイヤー (kuiya) と述べています(『スシュルタ』「ストトラ・スターナ」一三一一三)。カリーダーサはクムダ花の描写を秋にしています(『リトッ・サンハーラ』三一一)。

パドマ花を常に湖沼で描写することが詩人の慣用表現であるように、クムダ花もまたそうです。ただ、この花が日中開花することは認められていません(『カーヴィヤ・ミーマンサー』)。『バーヴァ・プラカーシャ』(「プシュパ・ヴァルガ」一〇二)によれば、茎や葉等具备了完全なクムダ花をクムディニー (kumudini) と言います。

一〇 クラバカ樹 (kurabaka)

クラバカ樹は、乙女の抱擁によって開花することになっています。アマラサインハによれば、これはジんティイ (jinti) の一種です。ジんティイは四種類あり、それぞれ赤色、白色、黄色そして青色の花をつけています。『ダンヴァンタリ語彙集』によれば、黄色のサウレーヤカ (saureyaka) つまりジんティイがクランタカ (kuraṅṅtaka) 、そして赤色のものがクラバカです。ジんティイをヒンディー語ではカトサライヤー (Katsaraiya) 、あるいはピヤワーサー (piyawasa) と呼んでいます。赤色の花をつけたカトサライヤーのみがクラバカと称されます。『アマラ・コーシャ』でも、クラバカの花は赤いことになっています。『ラーマーヤナ』(一一二二)の春の描写に赤色のクラバカの花の記述があります。カリーダーサは *Syamavadaruna* すなわち黒味がかった白味がかった赤色のクラバカの花を描写しました。樹木の知識に詳しい私の友人ハリダース・ミトラ教授は、シャーンティ・ニケータンに植えてある一本の木をクラバカ樹だと教えま

した。この木はカチニナル (Kachnar \langle Skt. *Kanchara*) の一種です。やや小振りで少し茂っています。一見すると、まさにカチニナルに見えます。早春花をつけ、花は平凡で葉柄の付け根がやや赤味がかっています。この花を見るとコーヴィダーラ

(Kovidara) の花が連想されます。古代インドの語彙編纂者は、コーヴィダーラとカチニナルを同一視しました。しかしバーヴァ・ミシユラは両者を区別しました (『バーヴァ・プラカーシャ』「プシユバ・ヴァルガ」)。彼によれば、カチニナルは *sona-puspa* つまり赤い花をつけていて、コーヴィダーラは白い花をつけています。ラージャシユーカーラは春の描写について述べたところで、カチニナルとコーヴィダーラを区別して記述しました

(『カーヴィヤ・ミーマンサー』一九)。しかし『ラーマヤナ』(四一三〇一六二) や『リトッ・サンハラー』(三三六) では、コーヴィダーラの花は秋に描写されています。私達は、特定のカチニナルが秋に開花するの否かを正確にはわかりません。しかし以上の例から、ラージャシユーカーラとバーヴァ・ミシユラは同種のコーヴィダーラを知っていたこと、ヴァールミキとカーリダーサは別種のものを知っていたことが明らかです。ハリダース教授の木は、バーヴァ・ミシユラと同じコーヴィダーラではなかったでしょうか? 結論として、それがクラバカ樹でないことは明らかです。

カーリダーサはクラバカの花が春咲くを見ました。『ラグ・ヴァンシャ』(九一二九) に、その描写が春にあります。『マラーヴァイカー・アグニミトラ』の春の描写については、すでに言及しまし

た。クラバカ樹に関する詩人の慣用表現についての記述は『カーヴィヤ・ミーマンサー』にはありません。しかし同書(一九)に引用された詩句によって、この慣用表現が裏づけられます。『メーガ・ドゥータ』の中でカーリダーサはヤクシャの庭園描写に際し彼をしてこう言わしめています、その庭園のマードヴィー鳥に覆われた休息所の柵はクラバカ樹であった、と。『マラーヴァイカー・アグニミトラ』の最後の幕から、春の盛りを過ぎるとクラバカ樹の実が落ち始めることがわかります。これら二点からも、クラバカの花はカトサライヤーであることが正しく思われます。

一一 コーキラ鳥 (Kokila)

詩人の慣用表現では、コーキラ鳥は春のみ鳴くことになっています。夏や雨期にもコーキラ鳥が鳴くことは事実ですが、春の鳴き声にある甘美さは他の季節にはありません。秋から冬までこの鳥は全く沈黙するために、一部の学者達はこの季節に渡り鳥となり他の場所へ去ってしまうのだと誤認しました (『カーリダーセル・パークー』一一〇ページ)。しかしウイスラーは、コーキラ鳥はインド国内の範囲でのみ季節に応じて往来する事実を指摘しました (A Popular Hand Book of Indian Birds. P. 252)。

若干の極寒の地方を除けば、通常全インドで一年を通じこの鳥を見ることができ、葉陰に隠れて時を過しています。驚くべきことは、他の季節はこの鳥の沈黙がまず破られない点です (『カーリダーセル・パークー』一一〇ページ)。春この鳥は身ごもるまでの間陶

酔したように鳴き続けます。

コーキラ鳥を、詩人達は春と陶酔両者の表現手段として描写しました(『リトウ・サンハーラ』六)。コーキラ鳥が春以外の季節でも鳴くという修辞学者達の主張は正当ですが、春の鳴き声こそすばらしく比類のないものであると述べるのがよりの射を射てます。秋から冬にかけてこの鳥はまず鳴くことはありません。

一二 チャコーラ鳥(cakora)

チャコーラ鳥は月光を飲することになっています(『カーヴィヤ・ミーマーンサー』一四、『サーヒティヤ・ダルバナ』七一三三)。
『アマラ・コーシャ』の注釈者クシーラスワミーは、チャコーラ鳥は月光により渴きが癒されると記しました。チャコーラ鳥とマユーラ鳥は同一種族の鳥です。文学中マユーラ鳥の白眼について描写同様、チャコーラ鳥が月光を飲することについては実的な根拠があります。鳥類学者は、チャコーラ鳥が時々日中も鳴き出すことがあるにせよ夜とてもさわがしくなることを指摘しています。この喧噪の中に感傷的な人々は喉の渴きを重ね合わせて感じとったのでした(Hume and Marshall: The Game Birds of India, Burmah and Cylone. vol. II (1879). p. 38)。

一三 つがいのチャクラワカ鳥(cakravakami thuna)

この鳥はハンサ鳥の同種族です。日中は常に雌雄一緒にしているのが見られます。インドの諸言語の文学は、この鳥の純愛物語で満ちて

います。詩人の慣用表現によれば、雄と雌のチャクラワカ鳥は日中川や湖沼の一方の岸にいて、夜雄は一方の岸に雌は他方の岸にというように離れ離れになります。一夜が別離のうちに過ぎます(『カーヴィヤ・ミーマーンサー』一四)。
『アグニヴェーシャ・ラーマヤナ』には、妻との別離に悶悶とするラーマをみてチャクラワカ鳥がからかい、その報いとしてこのように離れ離れになる呪いを受ける話があります(『カーダムバリー』の注釈にこの話が載っている)。ラージャッシュェーカラは、これを詩人の慣用表現の中に認めながらもこの俗信の真偽を疑いました。『スシュルタ』の注釈者ダルハナ・パッタはチャクラワカ鳥の説明で、夜離れ離れになることを述べています(『ストトラ・スターナー』四六一一〇五)。
カーリダーサの諸作品からもこの俗信が裏づけられます。パウシャ月に川で苦行していたパールヴァティーは、別離に悶悶する雌雄のチャクラワカ鳥の切ない呼び声を聞きながら時を過しました。鳥類学の有名な学者サティヤチャラン・ラーハー氏は、この鳥がインドに定住せずチャイトラ月、ヴァイシャカ月にヒマラヤの方角へ渡ること、高度一万から一万五千フィートの山の割れ目に巣造りしているのを見たことを記しています。彼は自らシッキムやヒマラヤの旅で、チャグー・フラド(一二六〇〇フィート)にこの鳥が棲息しているのを六月に見ています。秋この鳥は再びインドに戻ってきます。

ヴァールミーキやトウルスィーダースの『ラーマヤナ』から、この鳥が雨期に他の場所へ去ることがうかがわれます。ある別種の

チャクラワーカ鳥は秋インドに飛来し、他の季節は別の場所に棲んでいます（『ジャルチャリー』一一〇ページ）。

カーリダーサの『ラグ・ヴァンシャ』等の作品から、彼がこの鳥を全インドで目にしたことがうかがわれます。事実、この鳥は全インドでみつかります。つがいのチャクラワーカ鳥の別離の話の真びょう性について、満足りく吟味はまだなされていません。ステュアート・ペーカーは、夜雌雄が離れて行動し互いを求め合い呼び合うように思われると記しています（*Ducks and Their Allies*, 1921. p. 146）。カーリダーサは互いに涙にくれるチャクラワーカ鳥を描写しています（『クマラー・サンバヴァ』五一―二六）。ウイスラーは、この鳥が日中雌雄一語にとまって休息をしほとんど行動しないこと、たとえどこかへ行くにせよ行動を共にすること、しかし夜は離れて餌をあさることを記しています（*A Popular*

Hand Book of Indian Birds, 1928. p. 407）。『ラーマヤナ』（四一三〇―一〇）には、この鳥が一語に行動する描写があります。夜餌をあさるために離れ離れになることが、おそらく詩人の慣用表現の根拠です（『カーリダーセル・パーキー』一二七ページ）。

この鳥は主に草食です。カーリダーサは、この鳥がウトパラ（*utpala*）やケーサラ（*kesara*）を食している描写をしました。『リトゥ・サンハラー』には、カマラやケーサラを食しているまた互いに涙にくれるチャクラワーカ鳥の描写があります。

一四 チャンダナ樹 (*candana*)

(1)

詩人の慣用表現に従えば、チャンダナ樹には花や実の描写があつてはいけません（『カーヴィヤ・ミーマンサー』一三）。『バーヴァ・プラカーシヤ』には、白、黄、赤三種のチャンダナの記述があります。黄色のチャンダナのみが、カーリヤカ（*Kaliyaka*）またはハリチャンダナ（*harricandana*）と呼ばれます。ダンヴァンタリによれば、チャンダナとシェヴェータ・チャンダナ（*svetacandana*）は同一物です。マラヤ山（*Malaya*）のチャンダナは、*バドランジュリー*（*bhadraśrī*）と言います。タイラバルナ山（*Talaparāṇa*）そしてゴシールシャ山（*Gośīrṣa*）にも、これらの山の名を冠したチャンダナがあります（『カルプーラー・アーディ・ヴァルガ』（一四―一六）。『ヴァナウシャディ・ダルバナ』（二五―二六ページ）の作者は豊富な学術的検討の後、白色と黄色のチャンダナは別個のものではないと決定しています。チャンダナ樹には、初めうすい色の、後でむらさき色の小さい実が多量になります。実は丸くやわらかで、熟すると黒く変色します。ただし詩人はこの樹の実と花の描写はしていません。

たとえ詩人の慣用表現ではチャンダナ樹の実や花が描写されないにせよ、『ラーマヤナ』（四一―、八二―八三）には開花の描写があります。後世の詩人達の中にも何人かはこの木の実や花を描写しています（『スパーシタ・ラトナ・バーンダーガラ』三七七―七七ページ）。

(11)

チャンドナ樹に関するもう一つの慣用表現は、この木がマラヤ山にだけあるということ（『ヴァナウシャディ・ダルバナ』）。インド伝統医学の書物によれば、地域差による五種類のチャンドナについて述べられています。パドラシユリーはマラヤ山にあり、ゴーシールシャ、ウルカラ（varkara）そしてタイラバルナはこれらの名の山にあることになっています。ヴェーリッタ（vetia）とスッカダ（sukkada）は同一物です。一方は未成熟の伐採された木に、他方は成熟した木に由来しています。ある見解によれば、マラヤ山のチャンドナ、ヴェーリッタ、スッカダは同一物です（『ヴァナウシャディ・ダルバナ』）。ブランドイスは、この木がインド亜大陸の西部ナースィクから北部のアルカートにかける地域に多く生育していること、庭園等への植樹により北部インドのサハランプルまで分布していること、花は一月から七月まで咲き続けていることを記しています（Indian Trees. P.553）。

この詩人の慣用表現の根拠は多分、マラヤ山にのみ大量にみられることです。ラージャシエーカラはマラヤ山の四大特色の一つとして、蛇にからまれたチャンドナ樹があることを挙げています（『カーヴィヤ・ミーマンサー』一七）。この山のニンバ（nimba）やクタジャ（kutaja）等の樹木もチャンドナ同様香気がぐわしい、と詩人達は描写しています（『スパーシタ・ラトナ・バーンダーガーラ』三九九ページ）。

（以下次号）

